

プ (“Dynamics of Socio-economic Change, Local Environment and Livelihood in Southern Africa: From the Approach of Area Studies”) を開催した (写真10)。上級生たちが長い時間をかけて準備したプレゼンテーションを行ない、新聞社も取材に来ていたので、後に発表者たちは新聞に写真が掲載された。翌日は、朝食後、泊まっているペンションで閉会式を行ない、充実したフィールドスクールは無事幕を閉じた。お昼には私はすでに飛行機の上にいた。



写真10 ナミビア大学で行なわれた国際ワークショップ
ASAFASの院生たちが研究発表を行なった。

タイ・フィールドスクールの概要

片岡 樹*

2010(平成22)年9月12日から20日まで、「組織的な大学院教育改革推進プログラム—研究と実務を架橋するフィールドスクール」の一環としてタイ国でのフィールドスクールを実施した。日程は下記のとおりである。

9月12日：チェンマイ空港に集合。

9月13日：チェンマイからチェンマイ県チャイプラカーン郡ファファイー村へ。共有林の住民グループの話を聞く。同郡のフオイボン村で宿泊。

9月14日：チェンマイ県ファーン郡、メーアーイ郡へ。有機農業グループの代表者の話を聞き、ミカン園を見学する。フオイボン村泊。

9月15日：フオイボン村で終日過ごす。

9月16日：チェンマイ県からチェンラーイ県へ移動。タートンからドーイ・メーサロンを経てメーサーイの国境市場を見学。さらにチェンセーンに移動し宿泊。

9月17日：チェンセーンからチェンマイ市に移動。市内のNGOによるストリート・チルドレン支援活動を見学。チェンマ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

イ泊。

9月18日：チェンマイ市内の市場を見学。
午後は Link の事務所で総括討論会。

9月19日：終日チェンマイで過ごす。翌
日のワークショップの準備。

9月20日：チェンマイ大学でワークショップ。
夕刻にチェンマイ空港で解散。

このフィールドスクールの目的は、タイ北部で水源林の環境保護を支援している NGO のフィールドを訪ね、現実に目の前で起きている問題にいかに関わるかを考えることを通じ、フィールドワークや学問について考える視座を養うことである。

我々に協力してくれたのは Link という NGO である。これはタイ国北部、チェンマイ県北端のミャンマー国境に近いファーン川沿いの村をフィールドとし、そこで共有林づくりを行なう村人グループを支援している団体である。¹⁾ 具体的には、共有林の地図づくりを支援するのが主な内容である。共有林が成り立つためには、村人内部で一致してその取り決めを守るだけではなく、外部の人々にもそれを認めてもらう必要がある。なぜならば、法的には国有林である場所を事実上村の管理のもとに運営するには、それを政府（とくに森林局）が少なくとも黙認する必要がある、また不法伐採を行なう外部の業者がそこを共有林と認め立ち入りを断念する必要があるためである。そのためには、村人自身が、共有林の区画と管理維持の実績を外部に向け

て客観的に証明しなければならない。従来のような、村人どうしの暗黙の了解に頼った森林経営だけではだめで、それを客観的データとして提示することが現在の共有林運動には求められているのであり、そのために GPS 等を用いた測量、作図の技術を提供するのが Link の役割である。

Link の代表の木村茂さんは、学部時代の早稲田大学在学中に探検部でタイ国の山地を訪れ、山地でぶっつけ本番で覚えたラフ語の教科書を出版したという伝説の持ち主で、根っからのフィールド派である。大学院時代は人文地理学を専攻してチェンマイ郊外の農村で長期の住み込み調査を行ない、追手門学院大学で教鞭をとっていたが、数年前に一念発起して教職をなげうち、チェンマイで NGO（Link）を立ち上げたという経歴をもつ。研究と実務を架橋するためのフィールドスクール、という我々のプログラムにまさにぴったりの存在であり、今回のフィールドスクールも、我々のプログラムの趣旨を説明したうえで、木村さんに旅程のアレンジを依頼した。

今回のフィールドスクールの目玉は NGO による共有林支援であるが、それは日程全体のあくまで一部にすぎない。そのほかに、ファーン川流域の見学にあたっては、山地民カレン族（パカニョーとも呼ばれる）の村で毎晩ホームステイし、タイ国の山地での生活を参加者に体験してもらった。私もタイ国の山地でこれまで調査を行なってきたが、カレ

1) Link と木村氏の活動については、木村 [2007] を参照。



写真 1 共有林の立体地図の説明（ファファイー村）

ンの村で寝泊まりするのは初めてのことであり、いろいろと新しい発見があつて勉強になった。またファーン川流域では、地元の住民運動リーダーのナロンさんという人に、有機野菜販売の試みや、ミカン園ボランティアがもたらす環境問題や社会問題について話を聞きながら、彼の案内で現場を見学させてもらった。

ファーン川流域の見学の後は、山を越えてチェンライ県の国境地域に足を運び、中国から陸路移動してきた旧国民党軍の司令部が置かれた村や、ミャンマー国境の交易でにぎわうメーサーイの市場、さらにラオス、ミャンマーとの国境に近く、メコン川を下る中国の貨物船がひっきりなしに発着するチェンセーン港などを見学した。

チェンマイに戻った後は、アーサー・パッターナー・デック財団という NGO で働く出羽明子さんたちの案内で、市内のストリート・チルドレン支援活動の現場を案内してもらった。ビルマから流入した子どもたちや崩壊家庭の子どもたちがチェンマイで浮浪児となり、路上での物売りや児童売春の世界に巻き

込まれていく。街娼となった少年少女たちに避妊具を配布する巡回活動に同行させてもらったが、これは直接には売買春を助長する活動でもありうる。百パーセントの正義を求めればそうなるが、しかし目のより大きな問題を防ぐには、これは間違いなく有効である。安全な場所から正義を叫ぶだけでは世の中は改善されない。正義は決してひとつではないということを学ばされた。

フィールドスクールの最後には、チェンマイ大学社会学部で、参加者たちの見聞を総括するためのワークショップを企画してもらった。チェンマイ大学の先生たちにそれぞれコメンテーターを務めていただいたのだが、1、2 年生を主体とする 1 週間の駆け足ツアーの見聞を聞いてもらうには少々大げさだったのではないかと思う。プレゼンを準備する学生の側も困惑していたようだし、チェンマイ大学側も同じだったのではないかと思う。本プログラムでは院生主体による海外でのワークショップが奨励されているが、ひょっとすると再考の余地があるかもしれないというのが率直な印象である。

ところで、今回のフィールドスクールには、実はもうひとつ隠された目的があった。それは Link のフィールドでの活動を学生たちに見てもらうことのほかに、木村さんや Link のスタッフの富田さん、あるいは出羽さん自身を学生に見てもらうことである。日本人として東南アジアの現場に飛び込んで何ができるのか、彼らはどんな志をもって、どのような困難に耐えてそれを行なっているのか、また、学問の世界で得た専門知識をどう

やって援助の場に生かすのか。木村さん、富田さん、出羽さんらは、それを教えてくれる生の教材である。毎日見学の日程が終了すると、夕刻から夜にかけて、有志が木村さんや富田さんを囲んで酒を飲みながらいろいろなことを語り合った。結局毎晩宴会に終始してしまった感があるが、現地でがんばる日本人と本音で語り合うという点では所期の目的を果たせたのではないかと思っている。

最後に、この場を借りて、フィールドスクールの実施にあたりお世話になった Link の木村茂さん、富田千草さん、アーサー・パッターナー・デック財団の出羽明子さん、

チェンマイ大学社会学部のクワンチーワン・ブアデー先生にお礼を申し上げたい。また今回のフィールドスクールは、改革プログラム代表の竹田晋也先生および改革プログラム事務局の落合知子さん、小川裕子さんその他の方々の協力なくして実現し得なかった。あわせてお礼を申し上げたい。

引用文献

木村 茂. 2007. 「森と生きる人々に学んで—北タイの村おこし試行錯誤」加藤剛編『国境を越えた村おこし—日本と東南アジアをつなぐ』NTT 出版, pp. 135-163.

トルコの神秘主義教団を訪ねて

—あるムスリムたちの宗教実践—

西山愛実*

ここは、トルコのイスタンブールにある古い建物の一室。その中では、100 人を優に超える男性たちが腕を組み、輪になって周っている。輪の中心には、裾の長い白いワンピースのような服を着てくるくと巡回する若い男性、そして同じく長い、しかし黒い衣を身にまとい、体を上下に動かしながら、何やら呪文のようなものを唱え、皆を先導する初老の男性がいる。部屋の隅には、太鼓やタンバリ

ンのような楽器でリズムを取る者が数名並ぶ。20 畳程のその部屋には人があふれ、外はもう肌寒いというのに、部屋は熱気に包まれている。その半階ばかり上部に位置する女性専用の屋根裏部屋にまで、熱い空気と、加えて汗の匂いが漂ってくる。それともその熱気は、私の隣で、首や手を激しく振り回している若い女性から湧き立っているのであろうか…。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科